

2010年度 エコノメトリックスII & 上級エコノメトリックスII 第3回講義メモ

2010年10月8日

§ 2.2 線形回帰モデルの幾何的理

2.2.1 準備：ベクトル空間

いま、すべての要素が実数値をとる $n \times 1$ ベクトル x を考えることにしよう。すなわち

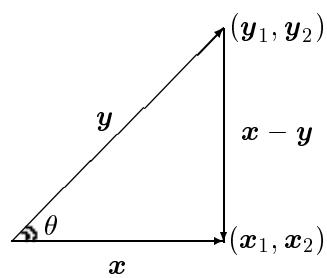
$$x \in \mathbb{R}^n$$

である。 n 次元の実数空間 \mathbb{R}^n に距離と内積を導入する。厳密に言うと、 n 次元のベクトル空間は \mathbb{R}^n を単なる集合でなく \mathbb{R}^n の演算まで入れて考えたものを指している。

$x, y \in \mathbb{R}^n$ としたとき、距離 $d(x, y)$ 、内積 $\langle x, y \rangle$ を次のように定義する。

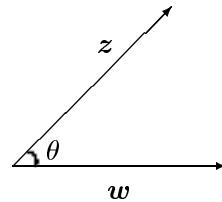
$$\begin{aligned} d(x, y) &\equiv \sqrt{(x - y)'(x - y)} \\ \langle x, y \rangle &\equiv \|x\|\|y\|\cos\theta = x'y \\ \text{where } \|x\| &= \sqrt{x'x} \quad (\text{ノルム}) \end{aligned}$$

\mathbb{R}^n に距離と内積を導入した空間を n 次元ユークリッド空間といい E^n で表す。



Note.

$w, z \in E^2$ とする。いま $w = (1, 0)'$ とする。ここで $\|w\| = 1, \|z\| = 1$ であるものとする。このとき、 $\|z\|^2 = \cos^2 \theta + \sin^2 \theta = 1$ であるから、 $z = (\cos \theta, \sin \theta)'$ と表すことができる。これにより、 $\langle w, z \rangle = w'z = \cos \theta$ が得られる。



一般化して $x = \alpha w, y = \gamma z (\alpha, \gamma > 0)$ とすると、

$$\begin{aligned} \langle x, y \rangle &= \alpha \gamma \langle w, z \rangle \\ &= \|x\| \|y\| \cos \theta \end{aligned}$$

がえられる。ところで、 $-1 \leq \cos \theta \leq 1$ であるから、

$$|x'y| = \|x\| \|y\| |\cos \theta| \leq \|x\| \|y\|$$

という不等式が得られる。なお、 $|x'y|^2 \leq \|x\|^2 \|y\|^2$ を Cauchy-Schwartz の不等式と言う。

線形部分空間 (subspace)

R^n の空でない部分集合 \mathcal{W} が以下の条件を満たすとき、 \mathcal{W} は R^n の線型部分空間 (linear Subspace) であるという。

- a) if $x, y \in \mathcal{W}$ then $x + y \in \mathcal{W}$
- b) if $x \in \mathcal{W}, a \in R$ then $ax \in \mathcal{W}$

テキストでは、 $x_i \in \mathcal{W}, b_i \in R$ について ($i = 1, \dots, n$)

$$\sum_{i=1}^n b_i x_i \in \mathcal{W}$$

として定義。そこで、再び定義し直すと、次のようになる。

部分空間 (線形)

$\{x_1, \dots, x_n\}; x_i \in E^n$ を基底ベクトル (basis vector) とする。さらに、 $k (< n)$ 次元の E^n の部分空間 $\mathcal{S}(x_1, \dots, x_k)$ を次のように定義する。

$$\mathcal{S}(x_1, \dots, x_k) \equiv \{z \in E^n \mid z = \sum_{i=1}^k b_i x_i, b_i \in R\}$$

$\mathcal{S}(\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k)$ は $\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k$ が張る空間という。

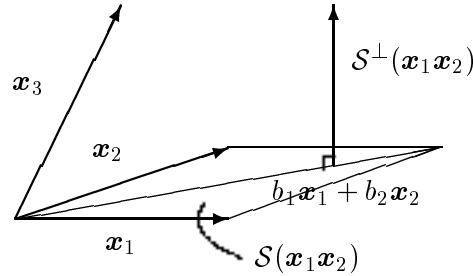
部分空間 $\mathcal{S}(\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k)$ の直交補空間 $\mathcal{S}^\perp(\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k)$ は次のように定義される。

$$\mathcal{S}^\perp(\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k) \equiv \{ \mathbf{w} \in \mathbf{E}^n \mid \mathbf{w}' \mathbf{z} = 0 \text{ for all } \mathbf{z} \in \mathcal{S}(\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k) \}$$

直交補空間の次元は $n - k$ となる。

(例) $k = 3$ のケース

$\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \mathbf{x}_3 \in \mathbf{E}^n$ としよう。この時 $\mathcal{S}(\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2)$ は \mathbf{x}_1 と \mathbf{x}_2 の線形結合の作る空間全体となり、 $\mathcal{S}^\perp(\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2)$ はその空間に直交する空間となる。



$$\mathcal{S}(\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k) \cap \mathcal{S}^\perp(\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k) = \{\mathbf{0}\} \quad \text{点: ゼロベクトルからなる集合}$$

$$\mathbf{E}^n = \mathcal{S}(\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k) \oplus \mathcal{S}^\perp(\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k)$$

ここで、 \oplus は直和 (direct sum) を表す記号である。

Note: 直和

$\mathcal{W}, \mathcal{W}_1, \mathcal{W}_2$ を \mathcal{V} (いまの例では \mathbf{R}^n) の部分空間としよう。このとき、 $\mathcal{W}_1 \cap \mathcal{W}_2 = \{\mathbf{0}\}$ であって、

$$\mathcal{W} = \mathcal{W}_1 + \mathcal{W}_2$$

かつ、 $u \in \mathcal{W}, u_i \in \mathcal{W}_i (i = 1, 2)$ について

$$u = u_1 + u_2$$

の形に一意に表現できるとき、 \mathcal{W} は、 $\mathcal{W}_1, \mathcal{W}_2$ の直和であるといい、

$$\mathcal{W} = \mathcal{W}_1 \oplus \mathcal{W}_2$$

で表す。

定義 2.2.1 一次独立

$\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k$ が一次独立 (linearly independent) であるとは、次と同値である。

$$\sum_{i=1}^k b_i \mathbf{x}_i = 0, \quad \text{iff } b_i = 0 \forall_i$$

定義 2.2.2 一次従属

$\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k$ が一次従属 (linearly dependent) であるとは、次と同値である。

$$\sum_{i=1}^k c_i \mathbf{x}_i = \mathbf{0} \quad \exists c_i \neq 0$$

命題 2.2.3

いま、 $\mathbf{X} = (\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k)$ であるものとする。もし、 $\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k$ が一次独立でない、すなわち一次従属であるならば、 $\mathbf{X}'\mathbf{X}$ は可逆 (invertible) ではない。

[証明] text p.53 参照。もし、 $\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k$ が一次従属であるならば、 $\mathbf{X}\mathbf{b} = \mathbf{0}$ を満たす $\mathbf{b} \neq \mathbf{0}$ が存在する。

$$\mathbf{X}\mathbf{b} = \mathbf{0} \text{ であるから, } \mathbf{X}'\mathbf{X}\mathbf{b} = \mathbf{0}$$

もし $\mathbf{X}'\mathbf{X}$ が可逆であるなら、

$$\begin{aligned} (\mathbf{X}'\mathbf{X})^{-1}(\mathbf{X}'\mathbf{X}) &= \mathbf{I} \\ \mathbf{b} = \mathbf{I}\mathbf{b} &= (\mathbf{X}'\mathbf{X})^{-1}(\mathbf{X}'\mathbf{X})\mathbf{b} = \mathbf{0} \end{aligned}$$

を満たす $(\mathbf{X}'\mathbf{X})^{-1}$ が存在することになる。これは $\mathbf{b} \neq \mathbf{0}$ であることに反する。

部分空間の次元

いま、行列 $\mathbf{X} = (\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_k)$ を考えよう。 \mathbf{X} の列ベクトルのうち、一次独立であるものの（最大）個数を \mathbf{X} の階数 (rank) といい、 $\text{rank}(\mathbf{X})$ で表す。このとき、

$$\text{rank}(\mathbf{X}) = \dim \mathcal{S}(\mathbf{X})$$

という関係が成立する。

定理 2.2.4

もし、 $\dim \mathcal{S}(\mathbf{X}) = k'$, $k' < k$ であるならば、

$$\mathcal{S} \underbrace{(\mathbf{X})}_{n \times k} = \mathcal{S} \underbrace{(\mathbf{X}^*)}_{n \times k'}$$

が成立する。ここで、 \mathbf{X}^* は \mathbf{X} のうち、一次独立な列ベクトルからなる行列である。

§ 2.2.2 OLSE の幾何的理

さて、前節のフレームワークを使って、OLS 推定量の幾何的理を試みよう。

線形回帰モデル $y = X\beta + u$ の OLSE は、 $\hat{\beta} = (X'X)^{-1}X'y$ で与えられる。いま、残差ベクトル \hat{u} を

$$\hat{u} = y - X\hat{\beta}$$

と定義するとき、

$$X'\hat{u} = 0 \quad (2.2.2.a)$$

が得られる。なぜなら

$$\hat{u} = y - X\hat{\beta} = (I - X(X'X)^{-1}X')y$$

であるから、

$$\begin{aligned} X'\hat{u} &= X'(I - X(X'X)^{-1}X')y \\ &= Oy = 0 \end{aligned}$$

が得られる。

言い換えると、

$$X'\hat{u} = 0 \iff \bar{x}'_i \hat{u} = \langle \bar{x}'_i \hat{u} \rangle = 0 \quad \forall i$$

すなわち、 \bar{x}_i , ($i = 1, \dots, k$) と \hat{u} は直交する。ここで、 \bar{x}_i は説明変数行列 X の i 番目の列ベクトルを指し、この授業の記法では

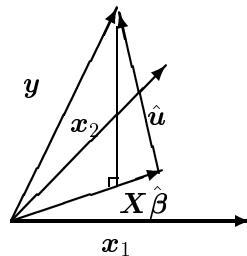
$$X = (\bar{x}_1, \bar{x}_2, \dots, \bar{x}_k) = \begin{pmatrix} \bar{x}'_1 \\ \bar{x}'_2 \\ \vdots \\ \bar{x}'_n \end{pmatrix}$$

という関係になっている。

さて、 $\hat{y} \equiv X\hat{\beta}$ とすると、

$$\hat{y} \in \mathcal{S}(X), \quad \hat{u} \in \mathcal{S}\perp(X)$$

という性質が導かれる。



上図より、 $\|\hat{u}\|$ が最小となるのは $X\hat{\beta}$ と \hat{u} が直交するときのみであることが分かる。ここから、モーメント法推定量 (MME) が最小 2 乗推定量 (OLSE) と等しくなることが分かる。

さらに、ピタゴラスの定理より

$$\begin{aligned}\|y\|^2 &= \|\hat{\beta}\|^2 + \|\hat{u}\|^2 \\ \underbrace{y'y}_{TSS} &= \underbrace{(X\hat{\beta})'X\hat{\beta}}_{ESS} + \underbrace{(y - X\hat{\beta})'(y - X\hat{\beta})}_{RSS}\end{aligned}$$

直交射影

$y \in E^n$ において

$$y = z + w \quad z \in \mathcal{S}(X), \quad w \in \mathcal{S}^\perp(X)$$

と表されるとき、 z を y の $\mathcal{S}(X)$ の上への直交射影という。この直交射影を変換行列 (= 射影行列) を使って考えるとわかりやすい。いまの例では、

$$\begin{aligned}z &= P_X y \\ w &= (I - P_X) y\end{aligned}$$

になる。

[memo]

- 部分空間に垂線をおろすイメージで捉えると理解しやすい。
- invariant sub-space 不変部分空間 = 部分空間への射影が部分空間で一定。

OLS では、次の 2 つの射影行列

$$\begin{aligned}P_X &= X(X'X)^{-1}X' \\ M_X &= I - X(X'X)^{-1}X' = I - P_X\end{aligned}$$

が重要である。なぜなら、

$$\begin{aligned}\hat{y} &= P_X y \in \mathcal{S}(X) \\ \hat{u} &= M_X y \in \mathcal{S}^\perp(X)\end{aligned}$$

この直交性は P_X が対称 (symmetric) であることに由来している。テキスト p.59 後半を見よ。
また、 M_X, P_X は冪等 (べき等 : idempotent) と呼ばれる行列であり、

$$\begin{aligned}M_X M_X &= (M_X)^\ell = M_X, \quad (\ell = 1, 2, \dots) \\ P_X P_X &= (P_X)^\ell = P_X, \quad (\ell = 1, 2, \dots)\end{aligned}$$

という性質を持つ。

次に P_X, M_X が onto であることを示そう。

$$\begin{aligned}P_X X b &= X b \\ M_X \hat{u} &= \hat{u} - X(X'X)^{-1}X'\hat{u} = \hat{u}\end{aligned}$$

であるが、さらに $M_X X = O$ より、

$$\hat{u} = M_X y = M_X X \beta + M_X u = M_X u$$

であることも注意。

一般に、

$$I = P_X + M_X \Rightarrow \begin{cases} y &= P_X y + M_X y \\ &= \hat{y} + \hat{u} \end{cases}$$

と分解できるが、 $X' \hat{u} = 0$ とすると、 $P_X M_X = O$ が得られる。これを annihilate (アナイアレイト) という。

ピタゴラスの定理より

$$\| P_X y \|^2 \leq \| y \|^2$$

Non Singlar transformation (非特異変換)

いま A を $k \times k$ の full rank の行列とする。このとき、

$$\begin{aligned} S(X) &= S(XA) \\ P_X &= P_{XA} \end{aligned}$$

が成立し、invariance residual の話がここから導き出せる。